

真宗教団論

——安田理深における教団論の展開——

木越 康

安田理深の教団論の思索は『教行信証』を中心とした親鸞の思想から、ルター・バルト・内村鑑三等のキリスト教教会論へとおよび、非常に広い視野からなされたものである。特にキリスト教教会論をもって教団を考えていくことは、安田の教団論にみられる顕著な姿勢であるが、その時氏はゲマインデとしていわれる教会の意義に、僧伽を超える根拠とする真宗教団の本質をみていくことをとする。

教団という言葉も、キリスト教ではキルヘ (kirche) という風に、あるいはエクレシア (ecclesia) と言いますが、やはりキリスト教の方でも、ぼくはルターだと聞いていますけれども、教団と翻訳されるようにゲマインデ (Gemeinde) という言葉を用います。そういう概念の方が今では用いられているようになります。(中央同朋会議・報告 I 「真宗の教団」) 教会をゲマインデとしてみていくことは、制度化し形骸化するキルヘ・エクレシアを、その本質としての「聖徒の交わり」という純粋な誕生の原理に還って捉えようとするものである。「聖徒の集会」としてのカトリック教会(エクレシア)は、「聖徒の交わり」と言われる神の国とその質において必ずしも同一ではないのであるが、カトリック教会も本来その「聖徒の交わり」としての神の国に存在の根拠を持つものである。従つて教会は、現実社会

においては神の国を直接示す唯一の神的な場となり制度となり、教会の執行する典礼などは、その恩恵の伝達者である司教の人格才覚信仰のいかんを問わず、有効であり絶対のものとなる。そのような教会観は、その後の時代に客觀化され、周知の通り中世カトリック教会の権威化・絶対化へと繋がっていくことになるのである。しかし、その中で教会をゲマインデとして、純粹に信仰共同体として捉え直すことは、安田にとっては、形骸化する教団を本来の姿に呼び覚ますものとして、大切にみられていたものと思われる。このことについて安田の隨想ノートには次のような言葉がある。

実存的共同体。僧伽は、共同体であるが、実存的共同体である。(『安田理深選集別巻一』四二頁)

宗教には教団という一つの超個人的世界が生まれてくる。單なる教学界といった思想的世界のみでなく、そこには Gemeinschaft が生起する。(『安田理深選集別巻一』三二三頁)

この、実存的共同体とは、安田にとって宗教的実存の共同体ということであり、清沢満之が「この現前の境遇に落在せるもの」として明らかにする。現に生きてあるもの、現実存在としての私という、そこにおいて開かれる共同体、つまりは宗教的実存において自覺される共同体ということを指すものである。それは、人間の「現にあるがまま」の自覺に於いて開かれる共同体という意味であり、カール・バルトがキルヘとしての教会の本来的意義をゲマインデとして捉え、それを無条件的共属関係として明らかにしていったことに強い影響を受けるものであったと考えられる。

この無条件的共属関係としての真宗教団は、親鸞が眷属・大義門功德をもって明らかにしようとする内容にその教学的根拠が求

められるものであるが、安田はそのことについて次のように言う。

淨土の莊嚴のなかに、特に開山が深い関心を持たれたのは眷属功德と大義門功德、あの二つを特に親鸞が注意していられるが、あの二つが僧伽をあらわす。(中略) 僧伽というものは、人間の作るものでない。人間のつくるものは皆別々である。もとは三三の品であるというのは人間のつくったもの、人間の作るものなら組合である。それなら教団ということがほかの社会と原理的には変わらぬ。(中略) 呼び掛けられた我々によつて念仏が僧伽の形をとる。僧伽を形成する人間の資格は勝れた人、役立つ人を必要とせぬ。僧伽は人間の努力を必要とせぬ。無能であつても僧伽はありえる。『真人』九号「教団と教学」)

ここで衆生に何等の資格や努力を求めずして、呼びかけられる我々によつて念仏が僧伽という形をとると言われる。これによつて教団が、念仏において開かれる実存的共同体として、無条件的共属關係に立つものであることが示されてくるわけであるが、まさしくこれは、ベルトによつて、「現にあるがままの私」の共属關係として示されるゲマインデの意義を有するものであると考えられる。また、安田はこれについて次のように言う。

信仰が内に自己を深める場合と外に自己を形成する場合について、問題は実存といふことが大事である。学問は実存の概念であり、教団は実存の形成である。我々は神学的実存であると共に教會的実存である。(『教団と教学』昭和二十四年五月二十九日真宗青年の会)

存を問う信仰的主体としての人間は、また同時に教会的実存として存在するものである。従つて、その主体が自己を内に深めることは同時に外に向つて自己が形成されることになるのである。この主体が内に自己を求めるところに同時に外に形成されるものが無条件的共属關係の自覺であり、それが本来の意味での教団として、実存的共同体と言われる所以である。

以上のように安田は、教会の本質を示すものとしてのゲマインデという言葉によつて教団を実存的共同体と押さえるのであるが、さらには氏はそのことに止まらず、この視点に立つて、実存的共同体が現実世界に於てどのような形を持ち得るのであるかということについて考察をするのである。真宗の教団は、現実世界における他の会とは異なつて実存的共同体でありながら、しかしあくまで現実社会の中において存在するという事実を捉え、その間に起つる緊張關係について問題にするのである。教団を、誕生の原理に帰つてその本質を明確にしていくことに対し、明らかにされた教団の本来的意義がいかに現実社会において展開し、人間の具体的集りとしての真宗教団となっていくことができるのかという問題である。これは内村鑑三が無教会主義を提唱するのに対し、真宗教団の有教団性に僧伽としての教団の積極的意義と責任とをみていこうとするものである。これについては「教団は、その墮落をも本質として持つ」という方向で展開されるのであるが、詳細については紙数の関係上別稿に譲りたい。